

基調講演：藤原辰史（京都大学 人文科学研究所 准教授）

ただ今ご紹介いただきました、京都大学人文科学研究所の藤原辰史と申します。今日は、どうぞよろしく願いいたします。

私は、今日30分の貴重な時間をいただきましたが、非常に強欲な人間でいつも発表時間は1時間半のつもりで準備する癖がついております。今日は、1/3にどうやって縮小するかを常に悩みながら、たまに早口になるとは思いますけれども、どうぞお話を聞いていただければ幸いです。それでは始めたいと思います。

簡単に自己紹介を。今まで16冊くらいの本を書いてきました。韓国で翻訳をされた本も最近多いです。簡単に申し上げれば、私は歴史研究者です。それとともに歴史から学べる哲学や思想ということ、特に食と農ですね。

私は食べるのが大好きなので、食べることを通じて思想や哲学がどのように考えられるのか、そうこうしているうちに古村さんにご飯を食べることが数回ありましたが、食べているうちにどんどんどんどん、アイデアが浮かんできました。食べるということは本当に考えているってことと深くつながっているということ、日頃の私も食べながら思う事があるんですけど、この食べるということが実は、20世紀の歴史の非常に重要なファクターだったということ、そしてその食べるということを通じた哲学が労働者協同組合の一つの思想となる哲学になるんじゃないかと思ひまして、今日はその、思想や哲学、歴史といった人文学の視点から労働者協同組合の意義をお話できればと思います。

いろいろ書いていますけれども、厚生労働省の関係でしたら『給食の歴史』がいちばん近いですね。その保育の現場と結構つながりが私ありまして、その食べるとか、育てるとか。そういうところで、多くの保育士さんや給食の関係者とお話しすることも多いですね。最近でしたら宮崎駿監督の作品の『君たちは今どう生きるか』という映画がありましたが、ジブリからご依頼をいただきまして、それについて論文を原稿用紙40枚くらいで書きました。そこで私が考えたのは先ほどのご挨拶にもありましたけれども、もう次の道を選ばなきゃいけない、これまで通りではもう行き止まりだということなんです。

新しい時代を作るためには、若い人たちやあるいは新しいアイデアを浮かんだ人達をもっともっと積極的に行かないといけない、そのメッセージとして最後宮崎駿さんはあの世界を大叔父によって作られた大きな世界を崩壊させているわけですけど、あの崩壊の仕方ってというのは、私は潔いな、と感じました。次の世代にあなたたちが考えないとうとうもないんだという強いメッセージを私は感じまして、そういうことを今日も私なりに考えたことをお話しさせていただきたいと思います。

さて、今日の内容は、労働者協同組合を通じてこの世界を変えていくのであれば、労働という概念を定義しなおしていかなければいけない、ということです。その一点に絞ってお話しを始めます。

そして歴史学的に見て、労働がどう破壊されてきたのか、つまり労働がどのようにないがしろにされてきたのかというお話しをし、最後労働を通じて新しい自治を作っていくという試みについていくつかご紹介したいと思います。

先ほど堀井局長からお話がありましたが、生きることと働くということというのは不可分であって、今その働くことと生きることの淡い間ぐらにあるところで人々がいろんな生きがいを見出しているところですけど、その労働という概念も結論から言ってしまうと、あまりにも狭く私たちは考えすぎてきたのではないかと思っています。

その一つがもっと広いのではないかということが、労働者協同組合法ですね。その第一行目に各人が生活との調和を保ちつつ、その意欲及び能力に応じて就労する、こういう機会があまりないというふうに書いている。つまり各人が働くということと、生活の調和を崩し、意欲もなくその能力に応じた仕事もないそういう状況が、むしろ今では普通になってしまっていて、それはある意味先ほど五十嵐市長からお話があったようにあまりにも市場に頼り過ぎた結果、労働というものがすごく商品化しすぎてしまって、今までせっかくあったポテンシャルがどんどんどんどん小さくなっていることが、労働者協同組合の一つのメッセージだと私は受け取りました。そうであるなら一旦「労働」とは何かということを一から考えてみようと思います。

私は、歴史研究者なので、いつも不都合な歴史からものを考える癖があります。マキャベリが言っているように、天国の道っていうのは、地獄の道を知らない限り到達することはできません。宮崎駿さんの『君たちはどう生きるか』、あれの下敷きにあったのは、イタリアのダンテの神曲ですね。あの神曲も第一部は、地獄から始まります。地獄から始まって、天国の道が描かれている訳です。まず労働という言葉を使って人を殺害、大量虐殺した歴史からお話ししていきたいと思っています。

アウシュヴィッツ強制収容所の最初の門には「アルバイト・マハト・フライ Arbeit macht frei」というドイツ語が掲げてあります。ご存知のように、「労働は、人を自由にする」という風に訳されますけれども、これ実はあのナチスにとってナチスの理想を語った言葉ですね。

この前古村さんとお酒を飲んでいて、結構労働者協同組合とナチスは似ているところあるんじゃないかな、と話していて。なぜなら、ナチ党の正式名称は、「国民社会主義ドイツ労

働者党」だった。「労働者」って言葉が入っている。しかも労働こそが人間を変えていくのだったという強いメッセージを持った。そういうふうな党なのです。

ですから、「アルバイト・マハト・フライ」というこの言葉、ほとんどの強制収容所の門に掲げられているのですけれども、これが何を意味しているかということ、労働はとても尊いんだということです。労働によって、政治的に国家に反逆したとかそういう人も、働くことでもう一回悔い改められる、働くことによって自分の新しい生き方っていうのを見つけられるという収容所のメッセージです。もともとドイツには中世に *Stadtluft macht frei* という言葉がありました。これは「都市の空気は自由にする」という意味です。中世の農奴と言われた奴隷的な農業労働をしている人たちのことですが、その人たちは都市に逃げて 365 日プラス 1 日いることで自由民になれる、都市の空気をそれだけ吸うだけ吸うと都市で立派な市民になれるということを表した言葉です。

実はこの都市の空気という言葉の代わりに、労働という言葉が入ったのがナチスのモットーです。労働をすることで私たちは自由になるっていう、一見よさそうな、もしかしたら労働者協同組合でも言われているかもしれないような、そんな言葉になっているのです。しかし、ここからが問題なのです。

ナチスはこの労働ということを経極めて狭い言葉で捉えていました。収容所では、常に選別がなされていました。「働ける人」と「働けない人」という選別です。あるいは、「健康である人」か、「健康でない人」か。鉄道が施設の内部まで敷いてあって、そのプラットフォームで、働かせる男たちと、働くに値しないと思われた女性や子どもたちが別々に並べられている写真があります。選別したのは医者でした。ナチスの場合のアルバイトという言葉は、健康かつ男性的な意味がどうしても強かった。それが彼らの労働という言葉の理想なのです。

アウシュヴィッツ強制収容所をくまなく見ていきますと。たとえばバラックにこういう言葉が残されています。「*Sauberkeit ist Gesundheit*」という言葉ですが、「清潔は健康の元」という意味です。これ自体とても重要な言葉というか、コロナ禍でいっぱいこういう言葉を見てきたと思います。ですが、ナチスにとって「清潔」という言葉も大変重要な言葉です。

清潔でいてくれることによって、少ない食べものでギリギリまで働いてもらって、あとは死んでもらう。そこまであなたは自分の努力によって出来る限り死なない、そのために顔を洗ってちゃんとシラミをとって頭を坊主にまらめて、ちゃんとした労働者になりなさい、という非常に強制的な意味がこの言葉にはあるのです。こんな中でナチスにとって理想的労働者は常に健常者ですね、それから男性的です。この国に役立つという大きすぎる目標

がこの理念には与えられていたのですが、おそらく労働者協同組合という試みはそうではなくて、もっと小さくて、あるいは、もっとローカルに根差してその土地に根差した労働と言う在り方を根本から変えていくものなんだと思います。だからこそ、先ほどの五十嵐市長から障害者の方たちの農場のお話がありましたが、そういうふうな形で健康とか明るいとか労働という言葉からは漏らしてしまうような働きこそをちゃんと私たちは捉えていくべきだというメッセージだと思っています。プリモ・レーヴィというアウシュヴィッツを生き延びたイタリア出身の化学者が、『これは人間か』という本の中で書いているのですが、私たちは誰かに命令されて清潔になるのではない。私たちは自分が人間である尊厳を保つために自らの顔を洗い、靴を磨いているのだ。私たちは就職活動をするときに私たちの大学では三年生になるとせっかく染めていた髪も真っ黒にし、せっかくかっこいい服を着ていても、真っ黒の服を着て自分は労働者の商品であるということで、就職活動に行きます。こういうことはドイツではありません。こういうふうな形で自ら自分を商品化していくのではなくて、自分をあくまでも自分らしく生きるために靴を磨いたり、髪を染めたりそういう風なことが許されるような社会であることも私は労働者協同組合のことが目指していることと、決して遠くないと思っているわけです。

そしてさらに労働という概念は古く、いろいろ古いところまで遡ってみると、もっともっと幅広いものだと思います。一言でいうと労働と芸術はどこが違うのかという話です。アドルノとホルクハイマーというドイツの哲学者が『啓蒙の弁証法』という有名な哲学書で面白い寓話を紹介しています。オデュッセウスという英雄が、セイレーンという海ですごくきれいな歌を歌う妖精たちの声を聞きに行くのですが、そこを通った人はすべからず妖精たちに足を引きずられて海にブクブク沈んでしまう。そういうふうな神話をもとに書いたエッセイです。オデュッセウスは、どうしてもこの世のものとは思えない歌声を聞きたいという思いに駆られ、自分の身体をマストに縛って、船の上では奴隷に耳栓をさせて歌を聞かせないようにしてひたすら漕がせる。こういう在り方が近代労働と近代的芸術の享受の始まりではないかということで、比喻としてこの言葉を使っているのですね。

この時に一番重要な彼らの言葉が、近代になって芸術の享受と肉体労働というのは別々の道を歩んでしまったと書いているわけです。本来「働くこと」と「心臓がドキドキしたり背筋がぞわってすること」は、そんなに遠くなかったはずなのに、いつの間にか私たちは強制的にあるいはなんらかの強引なルールによって無理やり働かされているのではないだろうか？

たとえば、農家農業では昔、歌と労働っていうのは、重なる部分がありました。労作歌という今ではほとんどどこでも聞かれなくなりましたね。労作歌と言うのは、労働のリズムに合わせて歌われる歌です。「朝の三時からよ〜」と言って稲こきをする。あのリズムでやる。そういうふうな歌です。けれども、労作歌は、たとえば、作業をリズムカルに進め

て肉体的苦痛を忘れさせる効果があります。あるいは、とてもエロティックな歌詞が多いので、秘かに一緒に働いている人たちに愛を告白するという、そういうおまけまでついていました。一方で、早乙女たちが田植えを植えるときは太鼓でどンドンとやりながらやるので、この太鼓のリズムに合わせて働かせたい時は、どンドン働かせるっていうそういう面ももちろんあるんですけども。昔から歌というのは、労働と一緒にしました。こういう田植え歌は結構残っているのですけれども、今は消えていっているわけです。おそらく労働者協同組合が目指すべき未来っていうのには仕事現場に歌があり、踊りがあるのではないかというのが、私の思いです。こういう風に、働くことはさまざまな行為が本来は重なっていた。歌う、ケアをする、話す、情報を得る、遊ぶ、楽しむ、踊る。このように多機能的な労働というものが純粋化されている。働くことは働くことである、という非常に狭いものになってきたのは人類史の中でわずか 120 年くらいの歴史しかないとは思っています。

120 年と申したのは、アメリカのフレデリック・テイラーという技師が発明した「テイラー・システム」、あるいはテイラー主義というものです。テイラー主義とは、私が『ナチスのキッチン』という本で取り組んだ 20 世紀を打表するイデオロギーです。テイラー主義は一人の映画監督によって見事に表現されていますよね。ご存知の通り、チャーリー・チャップリンです。彼の『モダンタイムズ』には、流れてくるラインの中でねじを締める仕事があるわけですが、このネジを締める仕事をずっとやっているの、このネジを締めるものが流れてこなくても手は勝手にネジを締める動作をつづける。あらゆる効率を求めると、食ベるという行為も全部全自動で食べさせてくれるけれど、これに身体が合わないっていうことをこの映像で明らかにしています。チャップリンが皮肉ったテイラー主義の原理は、テイラーの『科学的管理法』という本で明らかにされています。悪い意味の働き方改革です。それは、働きからおしゃべりをなくすということでした。どうやら働いている人たちは、お隣の労働者とおしゃべりながら働いている。これで効率が悪くなるんだ。しかも、彼は管理者にストップウォッチを持つことを勧める。私も大学受験を分単位で計画して頑張った人ですけども、あれは、まさにテイラー主義なんです。ストップウォッチで計って「さあがんばるぞ。さあ休憩がんばるぞ」。全てにストップウォッチがあったというのが、今考えたら僕はテイラー主義的な勉強をしていた。だけどそうではない働き方、勉強の仕方が本来あったのに、ひたすら労働者を効率的に使うという上からの命令で私たちはいろんなものを失ってきたのではないか、ということが見えてくるわけです。

これを体現する小説があります。ぜひ皆さんも読んでいただきたいのですが、アメリカのアプトン・シンクレアという小説家が執筆した『ザ・ジャングル』という小説です。日本語にも訳されています。1906 年に刊行されたものです。『ザ・ジャングル』は、シカゴのストックヤードにある巨大な食肉工場のものですけど、そこに潜入していろいろ知ったことをベースとして小説にしたものでした。ここは移民労働者が、際限なく搾取されている

ことで有名だったんですけど、シンクレアは入ってもっとビックリしたわけです。みんなヨーロッパから次々に移民がやってきて、すごく安い値段で、あの値切られて安い賃金で働かされているだけでなく、ちょっとでも反発したり、ちょっとでも上にもっと改善してくれと言ったらすぐに首を切られて、新しい労働者を雇ったり、あるいは黒人を雇ったりすることで労働が回っているようなそういう場所でした。なので、働いている人の気持ちが萎えているわけです。その結果何が起きているか、掃除が行き届かないわけです。

ゴキブリやネズミが走り回っている。それらの死骸をミンチ肉の中にそのまま入れていた。そしてそれを普通に売っていく。腐った肉も消毒液を入れて缶詰にして売っていたということ。それを彼は小説で明らかにしました。その結果、当時のアメリカの大統領であったセオドア・ルーズベルトが食品衛生法という法律を作るよう努力しました。結果として、ネズミの死骸はもう入らなくなったかもしれませんが、アメリカは非常に大きな宿題を残しました。それは何か？ 働いている人たちを守る法律をこの時に作らなかったということです。消費者主導だったわけです。本当は働いている、この工場で働いている人たちがせめてちゃんと自分たちの生き方を認めてくれるようになったら良かったのですけれども、そういうことではなかったわけです。

それは、この前のコロナの時期に証明されましたよね。アメリカで次々にクラスターが発生したのは他ならぬ食肉工場でした。ドイツでも発生しました。これもドイツのテンニースという搾取で有名な企業がやはり、東欧からたくさんの労働者を雇い入れてクラスターを発生させていた。とにかく労働環境の悪い、住宅環境の悪い中に人を突っ込んで安い賃金で移民労働者を雇っていたということが明らかに。今も食肉工場でそういうことが起きているわけです。

2001年には、アプトン・シンクレアの再来と言われたエリック・シュローサーが、やはりその食肉工場の現状を明らかにしました。『ファスト・フード・ネイション』という本ですが、これも日本語で『ファストフードは世界を食い尽くす』というタイトルで訳されていますけれど、ここでも次々に働きに来る移民労働者が過酷な仕事をさせられていて、ケガをしても病院に連れていかれるけれどすぐに引き戻されてしまって、血をポタポタ流しながら働いている様子とかを描いていきました。これは例外を描いているのではないとシュローサーは言っています。食べているハンバーガーのパテをたどっていくと必ずこのような労働現場に行きあたるんだ。私たちが美味しいと思って食べているものの背景をちゃんと知らない、そこには労働の搾取がある、ということを明らかにしているわけです。

こんな中で、私たちの世界で繰り広げられている労働。ナチスは、ドイツ人だけがその労働という概念をしっかりと反映できるという人種主義的労働観を有していました。労働者協同組合はそういうことではありません。勤勉は大和魂のひとりのあらわれであるという

ことは、戦争時代に使われていました。今は言われなくなりましたが、あらゆる人に開かれている、そしてその人たちが働くということによって排除されないということが重要だと思います。それは今全国各地で様々な試みが、労働と自治を統合するという試みがなされている訳です。

そうであるならば、労働という概念をもう少し柔らかく再定義し直さなければならない。「はたらく」という言葉を「はたらき」という言葉に置き変える、というのが私の提案です。

私は、農業の歴史や食の歴史をやっていることもありまして、人間と自然あるいは自然破壊の歴史の研究もしてきました。その中で私たちが人間として、これをやったというその動きにも、たとえば私たちに住み着いている細胞よりも多い数の微生物の働きや、あるいはそのやったという行動を起こすエネルギーも自然から取り入れた食であるということを経れば、私たちの働き、労働というのは自然と切り離して行われるものではないわけですね。そう考えるなら、さまざまなエコロジカルな「はたらき」の一つの表れとして、私たちはたまたま働いているにすぎないとさえ言えるかもしれない。こうして、労働という言葉をもう一回エコロジカルに問い直さなければならないのではないかとというのが私の今日のご提案です。そうしないと、まさにこれだけ山火事が起こって、次々に温度最高気温が今回イタリアで5度あがりましてけれど、本当にもう私たちが目の前に突きつけられている、今の国連事務総長の言葉を借りれば、地球の環境悪化とかという言葉でもぬるいですよね。彼は、brokenという言葉を使っていますけど、完全に環境破壊されている中で、もう一回、私たちの労働というものが、本当は自然とものすごく深くかかわっているというふうにシフトしていかないといけないと思います。そうして初めて私たちは、障害者の人たちが、たとえば、働くという行為の時に健常者をイメージしてそれにむりやり当てはめるのではなく、障害者の人たちがそれぞれやっているその働きというのを素直に全体の中で認められていけるというように考えます。

「態変」（たいへん）という障害者の劇団を主宰する金満里（キム・マンリ）さんという方と私は対談したことがあるのですが、キムさんは労働概念こそ障害者の価値を落とされてきたということをおっしゃっていた。その時の労働とは、おそらくナチスの労働と深く関わっているわけですね。私たちは労働という言葉で本当に苦しめられてきた。あなたたちは労働に価値を与え、働かざる者食うべからざるっていうけど、本当にそうなのか。「居る」ということの価値、そういったことを一回考えなければならないのではないかと、というようなことを金さんはおっしゃっていました。あとの事例紹介でも関連すると思いますが、「居る」ということを最大限に認めていく試みだと思います。「はたらく」ということをもう一回「はたらき」へと差し戻していくような試み、しかもそれは巨大な権力の操り人形という意味ではなくて、そこにおそらくケアという言葉も大きく変わってくると思

います。ケアというのは、健常者がそうでない方たちに施す慰みとかではなくて、健常者や障害者全く関係なく活動してつい発動する「はたらき」であって、それは自然と人間の関係もケアだし、人間と人間の関係もケア、農業だってケアだし、漁業だってケアかもしれない。ケアという言葉をもっともっと広げていくということも、この労働という言葉をもうちょっと柔らかくほぐしていくことの点と重なってくると思うわけですね。

ちょっと脱線気味になりますが、たとえば、ここで、近代農業ではなくて、アメリカの先住民がやっていた農業を思い起こしてもいいでしょう。「スリー・シスターズ・アグリカルチャー」と言います。今、農業はモノカルチャーとして一つの作物を大きな場所で、トラクターを使って、どうしても化石燃料に依存した農業が強くなっているわけですが、この先住民の農業は、トウモロコシの茎を支柱としてツルマメが蔓をまきつけ、ツルマメは空中の窒素を固定して植物が吸収可能なアンモニアにして土壌中に還元し、下はカボチャの葉っぱが覆って土壌の乾燥を防いでいく。そういう形でこの三つの植物がそれぞれ「はたらき」合っている農業というのがあったわけですが、これを私たち近代人は遅れている農業だということごとく潰してきた歴史がこの19世紀から20世紀の近代という歴史でした。でも、今みたらこれこそが実は農業のポテンシャルを最大限引き出しているものだと思うわけですよ。

全国でも食べものを通じて新しい人間関係を生み出そうという試みがあります。これは大阪のばんざい東あわじというおばんざい屋さんですけれども、ここでは1グラム1円でおばんざいを売っているのですが、500グラム以上は無料になります。そうすると持って帰って食べられるし、お手伝いをすると無料になります。

何が起こるかという、『給食の歴史』でも書いたのですが、今子どもの貧困。非常に日本では問題になっていますが、貧困家庭の子ども達にとって一番辛いのは8月です。夏休みです。私は夏休みすごく楽しみでしたが、その子たちにとっては地獄です。なぜなら給食がないからです。そういう子たちがここに来ると、ちょっとお手伝いしたりすることで彼らにご飯を無料で食べられるだけではなくて、人々にケアができるわけです。持って行ったり、調理を手伝ったりという形でそういう組み方をしている僕と同年の人が頑張っています。

それからフードバンク仙台は、ずっと貧困家庭に、たとえば企業から寄付を受けた食べものを提供してきたのですが、あまりにも加工品が多いのでそれは健康に良くない。だったらもうフードバンクが農地を借りて農業を始めたそうです。そして新鮮な食べものを与えるというのはどうだろうかという試みがある。病院が無料食堂を隣において、その食堂に人々がやってきて、治療とは関係ないけれどもしゃべるだけで人々はけっこう心が落ち着いたりすることが多いということに医者が気づいた。治療だけではどうにもならないと

ということで、これを併設された方もおられます。私の『緑食論』という本を読んでこれを作られました。こんなふうにもいろいろと新しい「はたらき」という言葉に変えていくことで、新しい試みが輝いて見えてくると言う風に思います。

最後にイタリアの事例をあげて終わりたいと思います。1926年にあるドイツ人の哲学者アルフレート・ゾーン＝レーテルがナポリに行った時に、ナポリ人たちはなんて変わったことをやっているのだとビックリした事例です。彼らは壊れた自動車を持つのが好きだ、壊れていると何が起こるかというみんなそれに向かって助けて直してくれるし、しばらく100メートルぐらい走って、またおかしくなったらそこにあるいろんなものを集めてまた修理する。ところが新しいピカピカものを与えられると途端にナポリ人は関心を失ってしまう。新しいものを恐れる。古いものはなんでいいかっていうと壊れるので人々が関係性を勝手に築いてくれる。その中で自分はものを大切に出来るということはこのナポリ人のいい加減さが人々のつながりをもたらししてくれるということを明らかにした、そういうエッセイなんです。

実は、さきほどの五十嵐市長の話聞いて、ちょうどピッタリだと思ったんですけど、イタリアの身体障害者やあるいは薬物依存回復をしている青年たちを農場で、しかも除草剤や化学肥料を使わないで雇っている事例を、広島大学の人類学者の松嶋健さんが紹介しています。

ここでは、社会は多様な人間、多様な存在からなっているからこそ、一緒に何かをすることができる。自然だって同じことだ。やれ害虫だ、やれ雑草だと言って排除するのは人間の一方的な都合であって、どんな草にも虫も微生物も自分たちの生を全うしているだけだ、ということを書いて、わざと面倒くさい農業をやっている。そのことによって社会から排除された人々が、自分達が本当に役立つ場所を自然に見つけていけるのだってということを書いていきます。さらに松嶋さんは発展させて、イタリアっていうのは結構不便で面倒くさいことが多いと。私もイタリアによく行きますが、本当に待たされることが多いです。でもわざと遠回りをしたり、不便なことを残したりすることによってケアが自然に押し付けられることなく生まれていく。スマート社会って言葉も重要かもしれないけど、そうじゃなくていろいろと私たちが手を尽くしたり手をかけたりいろいろできる、そういう凸凹をもう一回取り戻すことで私たちはもう一回働きの多様性を取り戻せるのではないか、今日はそういう風なご提案をいたしました。

労働の効率化ではなく働きというものを重ねるにしていくような社会。スマートな会社ではなくて強い目的が一個あるんじゃなくて、いろんな弱い目的が寄り添えるような、そういう場所作りというものが今求められており、それが労働者協同組合の目指している一つの理想の社会ではないかというのが私の考えです。

ちょっと時間がオーバーしてしまいましたけれども、ご清聴ありがとうございました。